

春夏秋冬 台湾徒然

第35回

台湾少年工

柳本通彦

もう10年ほど前になるが、神奈川県大和市から市民講座の講師を頼まれたことがあった。案内状に書かれた「大和市」という印象的な字面をみたときに、あつと甦った記憶があつた。

当日の講座は午後からだだったので昼前に市内に入り、道を尋ねたずねて目的の地にたどりついた。善徳寺——戦国時代に創建されたという由緒ある寺院である。

境内のほぼ中央にお目当てのものはあつた。意外に大きく、高さは大人の背ほどもあろうか。表には「台湾戦没少年の慰霊碑」と深く刻まれ、よくみると石全体が台湾本島の形に仕上がっている。

大和市は、かつて高座郡と称し、厚木海軍航空隊の基地があつた（現在米軍基地）。太平洋戦争勃発前後、ここに、

巨大な海軍の飛行機工場が建設されることになった。高座海軍工廠と呼ばれている。

往時、日本は食うにも事欠く時代だったが、男子の労働力も極端に欠乏していた。そこで、目をつけられたのが、台湾の子供たちである。大戦末期、実に八千余名の少年たちがここに送られてきた。最年少は僅か13歳だつたという。

衣食住が保証され、働きながら学べると担任教師から説得された人もいた。彼らは憧れの「内地」に希望の灯をもやしてやつてきたが、実際は勉強どころではなかつたのである。

米軍の空襲が始まると次々に仲間が散つていき、敗戦後は寮に遺棄された。神奈川県大和市は基地の町であるとともに、そうした少年たちの血と涙がし



善徳寺に立つ「台湾少年工の慰霊碑」

みた「台湾少年工」の町でもあつた。彼らは、当時植民地だつた台湾人子弟が通う学校で、特に選ばれた優秀な青少年だつた。何とか生還した人たちは、戦後、各界でリporterとして活躍する。

十数年前、初めて「高座会（彼らの同窓会）」を取材したときは、幹部たちのそうしたエリート意識が鼻持ちならず、私自身は身を引いてしまった経緯があるのだが、この間、地道に「台湾少年工」の史実を記録に残す苦心を重ねてきた人がいた。

彼らの成果は、『緑の海平線』（郭亮吟監督）という記録映画として結実し、昨年の台湾ドキュメンタリー映画祭に出品され、大きな反響を生んだ。

声高な自己主張を抑え、少年たちを送り出した側の日本人教師や厚木の米軍資料にもあたって、少年たちを襲つ

た過酷な運命とけなげな生き様が丹念に綴られていく。

スクリーンに登場し、証言する元少年工の老人たちもそれぞれ魅力的だつた。おそろく人前で話す機会も乏しいとみられる朴訥なお年寄りたちが、これもたんたんと当時の思い出を語る様子は、胸をうつものがある。

しかし空襲の犠牲となつた少年たちの魂にも、日本軍部の身勝手な思惑に翻弄された彼らの青春にも、ニッポンはなにも報いてこなかつた。大和市善徳寺にある慰霊碑は、元高座海軍工廠技手として少年たちの指導に当たつていた早川金次さんが1963年に自力で建立されたものである。

戦争末期、特攻隊として散つていった若者たちがいる。もしかしたら彼らの乗つた飛行機のなかには台湾の子供たちがその小さな手で組み立てたものもあつたのではないだろうか。そんなことを考えると、私は彼らの碑前に語りかけるべき言葉を失うのである。

やなぎもと・みちのこ

京都市生まれ。99年度「潮賈」ノンフィクション部門優秀賞受賞。著書に「台湾先住民・山の女たちの聖戦」（現代書館）、「台湾革命」（集英社新書）、「明治の冒険科学者たち」（新潮新書）など。最新刊に「ノンフィクションの現場を歩く、台湾原住民族と日本」（かわさき市民アカデミー出版部）